

以下の記載は、表題の診療ガイドラインから漢方製剤に関する記述を抽出したものです。診療において漢方製剤を使用される場合には、必ず、ガイドライン全体をお読みになり、その位置づけを正しく理解された上で行ってください。

ガイドラインのバージョンは最新のもののみを掲載しています。改定がなされていないガイドラインは、そのまま掲載しています。このガイドラインとその中の漢方の記載を、診療の参考にすべきかどうかの判断は、使用者の責任で行ってください。

抗がん剤適正使用のガイドライン

日本癌治療学会編 日本癌治療学会がん診療ガイドライン委員会 (委員長: 佐治重豊 岐阜大学 名誉教授)

日本癌治療学会、2005 年 6 月 25 日発行

■1 漢方薬

疾患:

乳癌

CPG 中の Strength of Recommendation:

C: 乳癌治療において代替療法を推奨するだけの根拠はない。

有効性に関する記載ないしその要約:

『乳がん治療として代替療法は有用か』

『いわゆる民間療法は、ある種の植物や人工合成物の服用、気功や運動療法、さらに温泉療法などさまざまなものが宣伝されていて 120 種類以上あるといわれている。そして、普及率 48～87%との調査もあるように癌患者の多くがこれら治療を取り入れている。経済的にも莫大な費用がつき込まれ 2000 年の国内の漢方薬市場だけを取り上げても実に 2 兆円を越えると報告されている。このように広く使用されているにもかかわらず、その効果や毒性について科学的に検証されたものはほとんどないのが実情である。(以下、省略)』

※本ガイドラインでは漢方は代替医療の一部とされており、漢方を含む代替医療全体として、「推奨するだけの根拠はない」とされている。